

「ゆだねます」(パラティセーミ) という喜び

尾崎二郎 牧師

私たちの十字架に至る歩みは、受難週(今年は4月13～19日)でクライマックスを迎えます。この週の間、洗足木曜日、受難日(聖金曜日)が置かれています。洗足木曜日には、主イエスが、敢えて弟子たちの足を洗って、その愛を実践されました。それから「ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(ヨハネ 13:14)と言われて、私たちが、互いに仕え合う者たちであることを示されました。そして、受難日に、主イエスは十字架に架かれ、息を引き取られたのです(ルカ 23:46)。

私たちは、いつ天に召されるのか分かりませんが、だからこそ、この受難週の主イエスと、常に共に歩んでいることが幸いである、と思わされます。

長く静岡草深教会を牧された辻宣道先生(1930-1994)は、著書『教会生活の処方箋』の中で、次の様に述べておられます。

「牧師の父親(辻啓蔵先生)が、第二次大戦中に、ホーリネス弾圧で刑務所に入れられ、家族が食うや食わずの生活を送っていた時、母親に言われて教会の役員だった人のところにカボチャを分けてもらいに行った。『おたくに分けてやるカボチャはないねえ。』以前は、真っ先に証しなどして張り切っている人で、みんなの尊敬を集めている人だった。『人間いざとなれば信仰もヘッタクレもなくなるんだなあと思いました。・・・カボチャの人物のように調子のいいときだけ熱心という人が多かったのではないか。』(百万人の福音 1999年4月号記事より)

このように時代は移り変わり、私たちの置かれている状況も移り変わっていきます。しかし、主イエスの御言葉はいつの時代も変わることなく、永遠に存続します(イザヤ 40:8)。その変わることがない御言葉によって生かされるのが、信仰者たちです。

辻宣道先生の著書『教会生活の処方箋』は、別府不老町教会において 1997年4月20日(日)礼拝後に開かれた合同例会の読書会で読まれました。又、宣道先生のご夫人 辻哲子先生は、同年9月27日(土)特別信徒修養会で「教会の質的向上」と題して講演、翌28日(日)には、特別伝道礼拝にて説教「神の愛の勝利」をなされました。(別府不老町教会百周年記念誌より。辻哲子先生のごことは、直接お会いになられた兄弟姉妹たちが、よくお話しになられます。)

このように、主の御言葉に全てをゆだねて歩む信仰者たちは、時と場所を超えて、永遠につながっていくのです。

イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。(ルカ 23:46)

主に自らをゆだねよ 主はあなたの心の願いをかなえてくださる。  
あなたの道を主にまかせよ。信頼せよ、(詩編 37:4～)